

研究ノート

保育士の視点からの将来展望に関わる 概念と研究手法についての考察

松浦 美晴¹⁾

Miharu Matsuura

キーワード： 保育士，離職，ライフコース，質的研究

Keywords : nursery teachers, turnover, life course, qualitative research

問題と目的

2020 年現在において、待機児童の問題は深刻である。厚生労働省（2019）による 2019 年 4 月 1 日現在の取りまとめによれば、岡山県岡山市の待機児童数は前年から 198 人の減少であったが、待機児童数 353 人と全国市区町村第 4 位の高水準であった。この結果について、岡山市長が「保育士不足が深刻になっている」と述べたことが報道された（日本経済新聞社，2019）。こうした待機児童問題を解消するには保育士の確保が欠かせない。特に、若手保育士の早期離職を含めた、保育士の離職を防ぐことが求められている。

保育士の早期離職の要因と対策については、澤津ほか（2019）が詳しく調査している。この実態調査は、岡山県の委託により、20 歳代の保育士に必要な就業支援および離職防止対策の検討を目的とし、20 歳代の若手保育士を対象に行われた。保育士職に関するイメージ、職場の勤務条件・福利厚生、職場の状況、行政や保育士養成校に対する期待が調査された。結果から深津らは、保育士の早期離職防止策として、給与改善、勤務状況の改善、養成校による長期的支援、行政による補助金施策および、管轄施設への職員離職率報告の義務づけと、業務を埋めるパート保育士の積極的活用を提案した。早期離職対策としての、行政を中心とした取り組みが望まれるといえる。

さらに離職対策においては、次の点に着目する必要がある。神戸・上地・松浦・鳥越・森・中川・荒島（2016）は調査の結果、保育職からの退職者のうち 30 歳代の者において、「他職種への興味」が高い一群が見られることを示した。また、香曾我部（2018）は、一度保育職へ就職した後離職して他職種へ再就職した潜在保育士へのインタビューを行い、離職に至るプロセスにおいて、勤務園以外の園への思いや他職種への思いが生じることを示した。

これらの結果は、一個人としての保育士の視点に立つことの重要性を示している。個人の視点から将来を展望したとき、保育職に関わることは展望の中の一部にすぎない。他にも、結婚、出産等のライフイベントや、神戸らや香曾我部が示すような保育職以外の他職種就業の選択可能性が含まれていることもある。個人としての保育士が、展望上の焦点を就業継続

¹⁾ 山陽学園大学総合人間学部生活心理学科

を困難とするライフイベントや他職種就業へ合わせている場合、保育職の待遇改善や研修等の対策に関心が向かず、容易に離職を選択してしまう可能性が高い。保育士の離職防止には、環境要因や個人要因の改善だけでなく、展望上の焦点の先が保育職やその支援策に向くことが必要と考えられる。保育士の将来への展望の姿と、展望上の焦点の動きを明らかにすれば、保育士の離職予防活動のための新たな知見を得られるはずである。そのための調査研究が望まれる。

本論ではその準備段階として、個人の展望に関わる概念や構成要素と、調査手法の要件を検討する。

展望の対象：ライフコース

「個人の展望」が成り立つには、「展望の主体」、「展望の対象」が必要である。本論の想定する展望の主体とは、ある時点における、一人の保育士のことである。

展望の対象を表す概念として、「ライフコース」が挙げられる。ライフコースとは、Elder (1978) により「The life course refers to pathways through the age-differentiated life span, to social patterns in the timing, duration, spacing, and order of events. ライフコースとは年齢分化された生涯を通じての経路、すなわち出来事の時機、期間、間隔、および順序における社会的パターンである (大久保, 1990 による訳)」と定義される。大久保は、この Elder の定義を、「経路、時機、期間、間隔、順序といった個々の用語についての説明がなされておらず、不親切」であり、「ライフコースそのものについての定義ではなくて、ライフコース・パターンについての定義として解釈すべきもの」としている。それに代わる定義を行うにあたって、大久保は、ライフコースの概念を整理した (表 1)。

大久保は、社会学におけるライフコース研究の共通の視点を挙げた上で、そこからライフコースの戦略的定義を「個人の生涯にわたる生活構造の変動過程」とした。この定義の戦略的意義について、大久保はまず、生活構造論とライフコース論の連結を可能にする点を挙げた。1 日の生活を時間軸に沿って配列したものが人の一生であり、ライフコース理論は、1 日の生活という現象に関する理論である生活構造論に時間という変数を導入することで求められるという。この時間とは、サイクルとしての時間すなわち生活時間ではなく、フローとしての時間であり、加齢という個人時間、社会的地位の変化である社会時間、時代の変化である歴史時間の複合であるとされる。

もう 1 つの戦略的意義として大久保が挙げたのは、生活変動論とライフコース論の連結を可能にする点であった。生活構造の変動、すなわちライフコースは社会構造の内部で生じるが、社会構造も歴史時間とともに変動する。ライフコースが社会構造の変動の影響を受けるだけでなく、あるコーホートにおいて特定のライフコース・パターンが多く選択されることで社会変動が生じるという。大久保は、このライフコースの概念が既存の概念であるライフサイクルと混同されがちであるとしたうえで、ライフコースが多様化していることや、ライフサイクルを構成するときの統計的方法の問題により、ライフサイクル論には限界があると述べた。そして、ライフコースの多様性のメカニズムを明らかにすることが、ライフコース研究の目的であるとした。

表 1 ライフコースの概念 (大久保, 1990 より作成)

<p>社会学におけるライフコース研究の共通の視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ①人間の一生を役割移行として捉える視点 ②人生上の様々な経験を, 役割移行を伴う出来事として捉える視点 ③役割移行の連鎖を分類し, それらが相互に関連する複数の経験の束としての人間の一生を捉える視点 <p style="text-align: center;">↓</p> <p>大久保の戦略的な「ライフコース」定義: 「<u>個人の生涯にわたる生活構造の変動過程</u>」</p> <p>定義の戦略的な意義</p> <ul style="list-style-type: none"> ①生活構造論とライフコース論の連結 <ul style="list-style-type: none"> 1日の生活という現象に関する理論 (生活構造論) + 「<u>時間</u>」変数 <li style="margin-left: 20px;">フローとしての時間 <li style="margin-left: 40px;">個人時間 <li style="margin-left: 40px;">社会時間 <li style="margin-left: 40px;">歴史時間 <li style="margin-left: 20px;">の複合 ②生活変動論とライフコース論の連結 <ul style="list-style-type: none"> 生活構造→変動→ライフコース ←外側の社会変動=歴史時間を変数として導入 <li style="margin-left: 20px;">生活構造 — ライフコース: 社会構造の内部で生じる <li style="margin-left: 40px;">↑パラレル, 影響を与え合う↓ <li style="margin-left: 20px;">社会構造 — 社会変動 <li style="margin-left: 40px;">社会構造: 個人が自分の生活を構造化する環境←歴史時間とともに変動する <li style="margin-left: 40px;">社会変動: コーホート単位でみるなら, 特定のライフコース・パターンを選択する人々が増えることにより変動 <p>ライフサイクルとのずれ</p> <ul style="list-style-type: none"> ライフコースの多様化によるずれ <ul style="list-style-type: none"> (結婚年齢の拡散や未婚率の上昇などによる, 代表値の代表性の低下) 共時性モデル (各時点のすべての個人を母集団とする統計的方法) によるずれ <ul style="list-style-type: none"> コーホート・モデルへの切り替えによって緩和される <p>複数の指標によるライフコース・パターンの分析で多様化を捉える (Modell, J.ら)</p> <ul style="list-style-type: none"> ①経験率 (その出来事のコーホート内の経験率) ②経験年齢 (中央値) ③経験年齢のばらつき (四分位範囲あるいは十分位範囲) 出来事間の関係 ④順序, ⑤間隔 <p>ライフコースの多様性のメカニズムを明らかにすることがライフコース研究の目的</p>

さらに大久保 (1990) は, ライフコース理論を整理した (表 2)。大久保は, ライフコース理論には, 分析の焦点をコーホートに置くマクロ理論と, 分析の焦点を個人に置くミクロ理論があると述べた。後者においては, 「個人にとっての個人」である自己が, 「社会にとっての個人」である役割を通して表現されたり, 抑圧されたりしていると捉える。これが生活という現象であり, この現象を不断に再生産している装置が生活構造であるという。生活構造は不断の変動過程の中にあり, 1週間, 1か月の時間幅では安定しているようにみえるが, 5年, 10年と時間幅が拡大すると, 行動パターンの消失や新しい行動パターンの発現をもたらす生活構造の変動がみられるという。大久保は, 変動には部分的な変動もあるとしたうえで, ライフコース研究者の関心は全体的な変動にあると述べた。また, 生活構造は一定の方向性を内在しているとされる。方向性には 3種類があり, 社会規範として全体社会が用意している方向性, すなわち, 一定の年齢で経験されるべき出来事群と, 他者あるいは所属集団の期待ないし要請としての方向性, そして本人自身が本当に望んでいる願望としての方向性がある。方向の先には将来の生活構造のイメージが存在しているという。方向転換を

伴う移行を転機と呼び、剥奪型と脱出型がある。そしてライフコースは、構築期と移行期が交互に引き続き起こる過程として捉えられているという。以上が、大久保がライフコース理論を整理した内容である。

表 2 ライフコースの理論（大久保，1990 より作成）

<p>ライフコース理論</p> <p>マクロ理論：分析の焦点をコーホートに置く</p> <p>ミクロ理論：分析の焦点を個人に置く</p> <p>ミクロ理論</p> <p>生活構造 生活という現象を不断に再生産している</p> <p><u>個人の所属する集団における役割</u></p> <p>「個人にとっての個人」</p> <p>「他者にとっての個人」を含む「社会にとっての個人」</p> <p>生活という現象</p> <p><u>「個人にとっての個人」（自己）が、「社会にとっての個人（役割）」を通して表現されたり抑圧されたりしている</u></p> <p>生活構造は不断の変動過程の中にある</p> <p>1 週間，1 か月という時間幅では安定</p> <p>5 年，10 年の時間では変動</p> <p>生活構造の変動</p> <p>部分的な変動 A→A'：生活構造の構成要素に変化が生じるが，本質的な構造は維持される</p> <p>全体的な変動 B→A：<u>いままでとは別の生活構造が誕生：移行←ライフコース研究者の関心</u></p> <p>生活構造→移行→将来の生活構造のイメージ</p> <p>方向性 (D)：d1～d3 の合成</p> <p><u>d1：社会規範として全体社会が用意している方向性</u></p> <p><u>d2：他者または所属集団の期待・要請としての方向性</u></p> <p><u>d3：本人自身が本当に望んでいる方向性</u></p> <p>方向転換を伴う移行：転機</p> <p><u>①剥奪型：個人の意思とは無関係に既存の生活構造が剥奪されることによって始まる</u></p> <p><u>②脱出型：既存の生活構造の構造的矛盾が徐々に、あるいは急激に大きくなることから始まる</u></p> <p>ライフコースは構築期と移行期が交互に継起する過程（Levinson, D. J.）</p> <p>①構築期：一定の生活構造のなかで一定の価値や目標が追及される</p> <p><u>②移行期：既存の生活構造から抜け出して新しい生活構造を構築するための重要な選択を行う</u></p>

表 1, 2 では、大久保の整理したライフコースの概念と理論の中で、保育士の離職や就業継続と関わると考えられる部分に下線を引いた。まず、ライフコースの定義である「個人の生涯にわたる生活構造の変動過程」は、本論が想定する「個人の展望」の対象である。定義の中の「変動過程」は「時間」とともに生じる。ライフコースは社会構造の中で生じる一方、あるライフコース・パターンを選択する個人が増えることにより社会構造の変動すなわち社会変動が起こり、それが個人のライフコースに影響を与えるという相互作用がある。例えば、保育士の待遇の悪化という社会変動により離職を選択する保育士が増えることによって、保育士の待遇を改善しようという社会変動や、保育士の待遇が十分ではないという情報が拡散するという社会変動が生じることがありうる。前者の社会変動の結果として個々の潜在保育士が復職を選択したり、後者の社会変動の結果としてさらに他の保育士が離職を選択したりといったことが起こると考えられる。また、生活構造において再生産される生活

という現象において、個人は保育士という社会にとっての役割を通して表現・抑圧されることになる。離職あるいは転職、復職のような別の生活構造への移行が生じる際には、移行先の生活構造イメージがあり、そのイメージへの方向づけは社会規範によるもの、周囲の他者の期待・要請によるもの、本人自身が本当に望むものの合成であると考えられる。離職あるいは転職、復職は、それまでのライフコースからの方向転換を伴う移行であり、転職といえる。転職は、剥奪型と呼ばれる結婚、転居、介護などによる個人の意思と無関係な場合もあれば、脱出型のように保育士としての職業生活における生活構造の構造的矛盾による場合もあるであろう。離職あるいは転職、復職は移行期に相当し、後の生活構造を構築するための重要な選択が行われるはずである。

保育士の離職防止を目的とする調査研究においては、これらライフコースの構成要素を想定しておく必要がある。

ライフコース研究

岡本(2002)は、「現代女性のライフコースの木」として、最終学校卒業後のさまざまなライフイベントにおける選択によって大きく分岐してゆく多様な女性のライフコースを图示した。示されたライフコースのパターンは、「～型」とカテゴリー化された。近年のコーホート研究でも、ライフコースのカテゴリー化が行われている。土田(2016)による、ある女子中等教育機関卒業生を対象としたコーホート研究では、結婚後の生活形態を、結婚あるいは出産を機にその後仕事に就かなかった「専業主婦型」、結婚・出産後に再び就業した「中断後仕事再開型」、結婚・出産後も仕事を継続した「職業継続型」の3パターンに分類して検討が行われた。またいくつかの調査研究では、ライフコースをカテゴリー変数として捉え、対象者にカテゴリーを選択させる手法がみられる。例えば、大日(2015)は、若年女性が理想とするライフコースの形成要因を調べる目的で、被説明変数となるライフコースを3つの選択肢として回答者に呈示した。選択肢は、「結婚・出産を機に退職し(産休育休は含まない)、その後は仕事をもたない」ライフコースである「専業主婦タイプ」、「結婚・出産を機に退職し(産休育休は含まない)、その後再び仕事をもつ」ライフコースである「子育て後再就労タイプ」、「結婚・出産にかかわらず、退職せずに仕事を続ける」ライフコースである「一貫就労タイプ」であった。伊藤・中山・池田(2018)は、就学前の子どもを持つ女性を対象とした質問紙調査において、回答者に将来のライフコースを3通り呈示し、それぞれを希望する程度を評定するよう求めた。呈示されたライフコースは、「フルタイムで働きたい」、「週に何回かなど、短時間だけ働きたい」、「仕事は一切せず、家事や育児に専念したい」であった。これらの手法は、大久保(1990)のいうマクロ理論に基づいていると考えられる。

一方のミクロ理論からライフコースを捉えた研究として、中村(2011)がある。中村は、母親の育児不安や育児サポートの推移、ライフコースの選択を捉えるため、幼稚園児の母親を対象に質問紙調査の後、同意の得られた13名を対象に2年の間を空けて2回の面接調査を行った。質問紙では理想のライフコースのカテゴリー選択を求めるという大日(2015)や池田ら(2018)と同様の手法をとったが、面接では専業主婦となるかどうかの選択の理由や、専業主婦としてのライフコースを受け入れるプロセス、将来のライフコースの見通しについて聞き取りを行った。他にも、石倉(2019)は、チェコの社会主義時代と民主化後の

女性研究者のライフコースの相違や、民主化が女性研究者のキャリア形成に及ぼした影響を分析するため、インタビュー記録の分析を行っている。

ライフコースのマクロ理論とミクロ理論の違いについては、西條（2007）のたとえがわかりやすい。西條は質的研究法で重視される内的視点を車の運転にたとえ、「運転席に座って運転している目線で、背景がどんどん後ろに行くような感じ」、対して外的視点を「全国マップ地図」と説明している。ライフコースのマクロ理論研究では、ライフコースを外的視点からマップの形で捉えその経路をカテゴリー化しており、ミクロ理論研究では当事者の内的視点によるライフコースを描いているといえる。「一個人としての保育士の視点に立つことの重要性」から始まった本論の立場においては、後者の視点を採用すべきと考えられる。

展望の概念

次に、個人の展望に関わる概念を取り上げたい。

ライフコースにおいては、「フローとしての時間」とともに生活構造が変動するとされる。したがって、展望の概念としてまず「時間的展望」が挙げられる。時間的展望には様々な定義があるが、よく知られるものとして、Lewin（1951）による、「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来および心理学的過去の見解の総体」がある。また、都築（1999）は、時間的展望が認知的側面、感情・評価的側面、欲求・動機的側面から構成されると述べたうえで、「個人の心理的な過去・現在・未来の相互関連過程から生み出されてくる、将来目標・計画への欲求、将来目標・計画の構造、および、過去・現在・未来に対する感情」と定義している。

次に、離職・転職に関わると考えられる展望の概念として、「キャリア・パースペクティブ」がある。キャリア・パースペクティブとは、「自分の人生における、職業生活を中心とした生き方の、実現可能性が加味された短期的・長期的見通し」（矢崎・金井，2005）と定義される概念である。キャリアとは「成人になってフルタイムで働き始めて以降、生活ないし人生全体を基盤にして繰り広げられる長期的な仕事生活における具体的な職務・職種・職能での諸経験の連続と、節目での選択が生み出していく回顧的意味づけと将来構想・展望のパターン」（金井，2002）と定義される概念である。

これらの概念と定義から考えると、一保育士の展望について次のものを捉えるべきであろう。まず、都築による時間的展望の定義からは、個人としての保育士は自らの展望内で過去・現在・未来を主観的に捉え、それらを総合してその後の離職や復職、就業継続を考えるとイえる。過去や現在に対する展望がどのようになされているかを、認知、感情・評価、欲求・動機を含めて捉える必要がある。また、キャリア・パースペクティブの定義内の「実現可能性が加味された短期的・長期的見通し」を捉える必要がある。キャリアの定義内の、「節目での選択」「回顧的意味づけ」「将来構想・展望のパターン」も重要と考えられる。

調査研究の手法

本論が「個人としての保育士が持つ将来への展望の姿を捉える調査研究」の準備段階であることを、最初に述べた。そこで最後に、その調査研究の手法に求められるものを挙げておく。

本論では、ある時点における一人の保育士を「展望の主体」と想定し、その保育士のライフコースを「展望の対象」と想定している。ライフコース上の展望は、その時点での保育士個人の立ち位置と、展望の方向、展望の範囲によって決まると考えられる。展望の範囲には、展望する時間幅としての範囲と、その中の各時点における生活構造内の範囲が含まれる。そこで今後行う調査研究では、立ち位置を離職、復職、就業継続等の選択を行った時点とする。そしてその時点からの展望が、時間軸と生活構造のどれだけの範囲を展望している、または展望していたのか、どのような内容が展望される、または展望されたのかを捉えてゆく。これは、西條 (2007) のいう、「運転席に座って運転している目線で、背景がどんどん後ろに行くような感じ」という内的視点に相当する。したがって調査研究では、質的研究法を用いることになる。

また、離職予防を目的とする調査研究であるため、介入可能な要因へたどり着く必要がある。ただし、繰り返しになるが、外的視点から社会環境要因を捉えるのではなく、当事者それぞれの内的視点からの展望にそれらがどう映っているのか、または映っていないのかが重要である。内的視点で離職の理由となっているものについては、環境要因を整えるだけでは不十分となる可能性がある。これまでの施策が展望に入っていないなら、あるいは選択の上で意味づけをされていないなら、どう介入すればよいのかを見出す必要がある。さらに個別の事例の中で、個人の生活構造の展望範囲だけでなく、当事者の無意識の水準に踏み込む必要が生じるかもしれない。これらを可能とする調査の手法を考案または選定する必要がある。

また、調査対象者の選定も重要である。ここでは、経験に焦点をあてたサンプリング (サトウ, 2009) が必要となる。離職した者、離職をせず職場に留まった者、離職後復職した者など、多様な背景のもとで何らかの選択を経験した保育士を対象とすることで、選択の背景や要因の多様性を捉えてゆく。さらに、それぞれが稀であると思われる事例を積み重ね、共通性と個別性を見出すことをめざす。稀な事例と思われるものが実は共通の要因により動いている可能性もある。

以上をふまえて、調査研究を設計することが望まれる。

文献

- 大日義晴 (2014). 若年女性における理想ライフコースの形成要因 社会福祉, 55, 187-199.
- Elder, G.H., Jr. (1978). Family History and the Life Course. Hareven, Tamara K. (Ed.), *Transitions: The Family and Life Course in Historical Perspective*. New York., Academic Press.
- 石倉瑞恵 (2019). チェコにおける女性研究者のライフコース— 保守的女性性とキャリアとの葛藤を中心に — 石川県立大学研究紀要, 2, 87-96.
- 伊藤里菜・中山満子・池田浩之 (2018). 育児期女性のライフコース展望に関連する要因の検討 発達心理臨床研究, 24, 17-26.
- 金井壽宏 (2002). 働く人のためのキャリア・デザイン PHP 研究所
- 神戸康弘・上地玲子・松浦美晴・鳥越亜矢・森 英子・中川淳子・荒島礼子 (2016). 潜在保育士のキャリア研究 : 20代 30代保育士の「退職者」と「継続者」の比較による離職防

- 止研究 山陽論叢, 23, 49-64.
- 香曾我部琢 (2018). 保育者が潜在化するプロセス—潜在保育士の後悔という感情に焦点を当てて— 宮城教育大学情報処理センター研究紀要, 25, 47-53.
- 厚生労働省 (2019). 保育所等関連状況取りまとめ(平成 31 年 4 月 1 日)および「子育て安心プラン」集計結果を公表 厚生労働省 Retrieved from https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000176137_00009.html (2019 年 12 月 1 日)
- Lewin, K. (Edited by Dorwin Cartwright) (1951). *Field Theory in Social Science*. Harper & Brothers.
- (レヴィン, K., 猪股佐登留(訳) (1979). 社会科学における場の理論 増補版 誠心書房)
- 中村真弓 (2011). 育児と女性のライフコース:幼稚園から就学過程における縦断的調査の結果から 尚絅学園研究紀要 A.人文・社会科学編, 5, 1-19.
- 日本経済新聞社 (2019). 岡山市の待機児童 353 人 4 月, 保育士不足でゼロ遠く 日本経済新聞電子版 2019.5.31 6:15 Retrieved from <https://www.nikkei.com/article/DGXMZO45481520Q9A530C1LC0000/> (2019 年 12 月 1 日)
- 岡本裕子(2002). 現代社会と女性—見えない壁 岡本祐子・美知子(編)新 女性のためのライフサイクル心理学 (pp.10-18) 福村出版
- 大久保孝治 (1990). ライフコース分析の基礎概念 教育社会学研究, 46, 53-70.
- 西條剛央 (2007). ライブ講義・質的研究とは何か SCQRM ベーシック編 新曜社
- サトウタツヤ (2009). HSS の発祥と TEM との融合 サトウタツヤ(編著) TEM では始める質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして (pp.33-54) 誠信書房
- 澤津まり子・秋山真理子・柴川敏之・鎌田雅史・伊藤 優・佐藤宏子・土倉由妃 (2019). 若手保育士の就業継続支援および離職防止への取り組み—就業状況の実態調査より— 就実教育実践研究, 12, 1-17.
- 都築学 (1999). 大学生の時間的展望—構造モデルの心理学的検討— 中央大学出版部
- 土田陽子 (2016). 地方における高学歴女性のライフコース選択—県立和歌山高等女学校の事例から— 紀州経済史文化史研究所紀, 37, 1-16.
- 矢崎裕美子・金井篤子 (2005). キャリア・パースペクティブ尺度作成の試み 日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集, 308—309.

付記

本論は、科学研究補助金基盤研究 (C) (一般) (課題番号 19K02603), および、山陽学園大学・短期大学令和元年度学内研究補助金の助成を受け行われた研究の一部である。